

研究ノート

牛のイメージに関する一考察

——中国のことばと文化——

鄭 高 咏

要 旨

中国人にとって牛は神のオーラを漂わせた動物である。中国の伝説には牛頭人身の神農や軍神蚩尤が登場するが、その姿形は古代ギリシャの神話のミノタウロスと共通している。古代中国における「牛」崇拝は、「物」という漢字からもうかがい知ることができよう。後漢の許慎は『説文解字』に、“物，万物也，牛为大物，天地之数起于牵牛，故从牛，勿声。”（物とは万物のことである。牛は大物であり，天地間のものは牽牛より始まった。ゆえに牛が偏であり，勿は音である）と記述している。牛は森羅万象の象徴であり，ここから牛がいかに重視されていたかがわかるのである。また古代中国の朝廷には牛の飼育を専門に担当する“牛人”という役職があり，『周官』によると“牛人掌养国之公牛，以待政令……”（“牛人”は国の雄牛を飼育して，待命し……）とされている。これも当時の人々が牛を大切に扱っていたことの一端であろう。牛は人類が最も早期に飼い慣らした動物に数えられ，農業大国である中国に果たした貢献は大きい。道教の仙人がよく青牛¹⁾に乗っているのは，古代，青牛は樹齢1万年以上の老木が変化^{へんげ}したものと信じられていたためである。トーテムとして，また五穀の神として，きわめて優れた生殖力と創造力を持ち，五穀豊穰や瑞兆をもたらすと考えられていた牛は，富の象徴でもあった。太古の牛に対する畏敬の念が人々の心に刻み込まれたため，中国の言語や文字には牛文化の影響が少なから

ず見受けられる。人々は「牛の視点でものを見る」を好んだことから、世の中は「牛」の色彩を帯びるようになった。すなわち「命名や比喻、描写に牛を用いる」という思考法が生まれたのである。本稿は、今日に伝わる「牛」の成語やことわざ、現代中国語における「牛」、民話に語られる「牛」、そして十二支の「牛」など²⁾、「牛のイメージ」を物語る語彙や文化を考察の対象とし、そのイメージを明確にしたものである。

キーワード： 人のたとえ、物のたとえ、良い面、良くない面

1 「牛」の字源

原始時代の壁画に描かれた野牛の猛り狂う様は野性味あふれ、迫力満点であり、考古学者に鮮烈な印象を与えた。とはいえ、原始時代の壁画の解明や解釈は容易ではなく、目下議論が進められている。

殷代後期の青銅器は形状こそバラエティに富んでいるが、装飾は牛をモチーフにしたものがメインであるため、「牛鼎」³⁾と呼ばれるものもある。近世に出土した殷代の“牛鼎”には「牛」を表す文字として牛の頭部が刻まれているが、これもトーテム時代における原始集落の絵文字の一つである（図1参照）。



このほか図2・3に見られるように、より書きやすい絵文字も作り出された。輪郭線のみで表されていた牛の頭部は塗りつぶされ、ほっそりしたが、牛の頭部をかたどっているという点に変わりはない。



牛のイメージに関する一考察

牛の頭部の記号は図案として殷周時代の青銅器や陶器を飾っただけでなく、文字として甲骨文や金文にも用いられた。青銅器と並び、殷文化の象徴である甲骨文は亀甲や獣骨に刻まれた文字であり、今日発見されている中国の文字でも最古のものである。甲骨文は亀の甲羅、もしくは家畜や獣の骨に刻まれたが、最も多く使われたのが牛の肩胛骨である。そして甲骨文には牛の頭の記号が頻繁に登場するが、殷墟から出土した甲骨文にも牛の頭に似た記号が数多く含まれている。甲骨文的牛の字形は4種類あるが、一般的に用いられていたのは図4の字形である。



図4

このころになると「牛」の字は、牛の頭部と突き出た角を表す線で記されるようになる。牛の字は甲骨文において、あくまでも本来の意味で用いられており、“幽牛”，“黄牛”，“白牛”，“物牛”，“九牛”といった語も甲骨文には数多く見られる。さらに「牛」は甲骨文字の構成要素として単独で用いることも、他の字と組み合わせて新しい漢字を作り出すこともできた。こうして生まれた漢字が“牝”，“牡”，“牧”，“牲”，“物”などである。

甲骨文字は不変のものではなく、「牛」という字は一貫して牛の頭部をかたどっていたものの、いささか変形した。図5から図9より「牛」の字形の変遷が見受けられる。



図5
(周代)



図6
(六国時代)



図7
(秦代・篆書)



図8
(漢代・隸書)



図9
(楷書)

中国最古の字書に数えられる『説文解字』では漢字を540の部首別に分類しているが、そこにはすでに「牛」部が設けられており、これに続く古代の字書でも、牛部を欠くものは一つとしてない。漢字には牛を部首とする字が果たしていくつ存在するのであろうか。統計によれば⁴⁾、『爾雅』では20余り、『説文解字』では50余り、『玉篇』では140余り、『康熙字典』では250余り、そして『漢語大字典』では330余りという。しかし今日用いられて

いる漢字で牛が部首のものは昔ほど多くはない。

2 「牛」と「^{いけにえ}犠牲」

古代において祭祀は厳粛な行事であり、こうした場に不可欠であったのが牛である。中国各地で発見された原始時代の壁画には祭祀の様を描いたものが少なくない。甲骨文には牛をいけにえとして供える習俗の記述がある。「犠牲」の二文字がいずれも牛偏であるのは、古代祭祀の際、供え物として最初に用いられたのが牛であり、しかもそれがごく一般的であったことを物語っている。

犠牲の「犧」という字は毛色が純一な牛の意である。『説文解字』⁵⁾には“牺，宗廟之牲也。”（犧とは宗廟のいけにえである）とあり、『玉篇』⁶⁾には“牺，纯色牛。”（犧とは純色の牛である）、『六書故・動物一』⁷⁾には“凡畜之牡，毛羽纯具者，牺也。”（禽獣の雄であり、単色の毛や羽を持つものが犧である）とある。このようないけにえの牛は「𧇧」ともいい、『説文解字』に“𧇧，牛纯色。”（𧇧とは牛で純色のもの）と記されている。

いけにえにする牛には色や体格などについて厳密な規定があり、無作為に牛を連れてきていけにえにしていた訳ではない。祭祀に用いる牛は「純色」かつ「完全」でなければならず、この条件を満たしたものが「牲」であり、古代祭祀に用いられた。『説文解字』には“牲，牛完全。”（牲とは完全な牛である）、『字彙・牛部』⁸⁾には“祭天地宗廟之牛完全曰牲。”（天地を祭る宗廟の完全な牛を牲という）とある。いけにえの牛は神や祖先に供えるものであり、直接その名を口にすることは禁忌とされていたため“一元大武”と呼ばれ、一般の牛と区別されていた。

牛をささげる祭祀は古代人にとって最も重要な祭事の一つであった。祭祀の際にはまず吉日を選ぶ。吉日が決まると、祭りで供えられる牛は「牲」と呼び名が変わる。祭祀に用いる牛に関しては必ず占いが行われ、結果が吉と出ればその牛がいけにえとされる。いけにえに選ばれた牛は良い餌を与えられ、美しく飾り立てられるなどの特別待遇を受け、人々の崇敬を集めたのである。

夏・殷・周の3王朝にわたり、祭事のいけにえとして牛がささげられたが、各王朝で尊ぶ色が異なっていたため、祭祀に用いるいけにえの色も推移した。夏代には黒が尊ばれたため、死者の葬儀を営むにあたり、納棺は夕方に行うことになっていた。また戦時は黒毛の馬が好まれ、祭祀には黒いいけにえが用いられた。殷代に尊ばれたのは白であり、納棺は真昼、戦時は白い馬に乗るのが好まれ、白いいけにえを供えた。周代の色は赤で、納棺は夜明け、馬やいけにえは当然赤毛を好んだ。

しかし孔子の時代⁹⁾になると、役牛やその子はいけにえにしてはならないとされた。農

耕社会において牛は生産の主力として重視されるようになり、人々の神に対する畏敬の念もいささか薄れ、より人間本位となった結果である。また祭祀のいけにえとなることこそ牛の崇高な務めであるが、役牛は「いけにえ」としてふさわしくないとされ、その用途は専ら田畑を耕すのみとなった。この矛盾した心理は、神中心から人間中心へ、狩猟から農耕へと社会が移行する時期としては自然なものであろう。

3 「牛」のさまざまな呼称

今日、「牛」は細かく分類されておらず、「牛」といえばウシ科の動物の総称になっている。呼び分けるとしても、せいぜい“黄牛”（黄牛），“小牛”（子牛），“母牛”（雌牛），“公牛”（雄牛）のように、「牛」の前に毛色や形状、性質などを表す語を補うだけである。しかし、かつてはきわめて具体的かつ詳細に区別していた。

① 年齢別

1歳の牛は“𧐇”といい、『集韻・止韻』には“牛一岁谓之𧐇。”（牛で1歳のものを𧐇という）とある。2歳の牛は“𧐇（牀）”であり、『説文』に“牀，二岁牛。”（牀とは2歳の牛である）、『玉篇』には“𧐇，牛二岁。”（𧐇とは牛で2歳のもの）との記述がある。“𧐇”と“牀”は異体字であり、いずれも2歳の牛のことである。3歳の牛は“𧐇”，『説文』によれば“𧐇，三岁牛。”（𧐇とは3歳の牛である）、4歳の牛は“𧐇”，あるいは“𧐇”で、『説文』には“𧐇，四岁牛。”（𧐇とは4歳の牛である）、『玉篇』には“𧐇，牛四岁也。”（𧐇とは牛で4歳のものである）とある。5歳の牛は“𧐇”，『本草綱目』によると“（牛）五岁曰𧐇。”（5歳のものを𧐇という）、6歳の牛は“𧐇”，やはり『本草綱目』に“（牛）六岁曰𧐇。”（6歳のものを𧐇という）と記されている。7歳の牛は“𧐇”という。8歳の牛は6歳の牛と同じく“𧐇”である。牛の年齢は歯と関係があり、牛は6歳以上になると歯が生え揃い、ゆえに“𧐇”と称するという。確かに『広韻・至韻』には“𧐇，牛具齿。”（𧐇とは牛の歯が生え揃ったもの）と記されている。

② 性別

先人たちは牛を性別に、雌牛、雄牛、去勢牛の3種に分類した。古代、雌の動物を“牝”と呼んだが、“牝”という字の原義は雌牛であり、それが後に雌の家畜を指すようになり、さらに雌全体へと語義が広がったのである。『説文』には“牝，畜母也。”（牝とは家畜の雌である）と記述されている。雌牛はこのほか、“𧐇”，“𧐇”，“𧐇”，“𧐇”，“𧐇”，“𧐇”ともいう。雄牛の呼称は雌牛よりもずっと多いが、最も一般的なものは“牝”と相対する“牡”であろう。『説文』に“牡，畜父也。从牛土声。”（牡とは家畜の雄であり、牛偏で、土は音である）、『広雅・釋獸』には“牡，雄也。”（牡とは雄である）と記されている。ほ

かに，“特”，“牯”，“犏”，“犛”，“牦”，“牼”，“牾”，“牿”，“牻”，“牼”，“牾”，“牿”などといった呼称もある。去勢牛は“牻”，“犛”，“犛”，“牻”といった。

③ 毛色別

毛色の純一な牛は“牼”（牼）といい、『本草綱目』には“(牛) 纯色曰牼。”（純色のものは牼という）と記述されている。また“牼”ともいい、『説文』に“牼，牛纯色。”（牼とは牛で純色のもの）とある。白いものは“牼”，あるいは“牼”であり、『説文』に“牼，白牛也。”（牼とは白い牛である），『本草綱目』に“(牛) 白色曰牼。”（白いものを牼という），『玉篇』に“牼，白牛也。”（牼とは白い牛である）と記されている。黒い牛は“牼”，『本草綱目』には“(牛) 黒曰牼。”（黒は牼という）とあり，赤い牛は“牼”，『玉篇』に“牼，赤牛。”（牼とは赤い牛である）とある。まだらの牛は“犛”，あるいは“犛”といい，『説文』に“犛，駁牛也。”（犛とはまだら牛である），『本草綱目』に“(牛) 駁曰犛。”（まだらのものを犛という）との記述が見られる。白と黒のまだらのものは“牼”，『説文』に“牼，白黒雑色牛。”（牼は白黒のぶちの牛）とあり，褐色と白のまだらのものは“牼”，『説文』に“牼，牛黄白色。”（牼は黄色¹⁰⁾と白のぶちの牛）とある。虎のような模様の黄牛は“牼”で，『説文』に“牼，黄牛虎文。”（牼とは黄牛の虎模様のもの）と記されている。このほか，耳の黒いものは“犛”，唇の黒いものは“犛”，目の縁が黒いものは“牼”，背の白いものは“牼”，腹の黒いものは“牼”，足の黒いものは“牼”といった。ところが古代には黄牛を表す固有名詞が存在しなかった。牛の色といえば黄色¹⁰⁾であったから，ことさら特定する必要がなかったのである。これについて段玉裁氏は『説文解字注』で“《尔雅》不言黄牛者，牛以黄为正色。凡不言何色，皆谓黄牛也。”（『爾雅』が黄牛について言及していないのは，牛の標準色が黄色であったためである。何色と触れていないものはすべて黄牛のことを述べているのである）と説明している。

④ 産地別と大きさ別

北方の牛は“牼”，南方の牛は“牼”，呉の牛は“牼”，広南の牛は“牼”，西南地区の長毛の牛は“犛”，西域の牛は“牼（犛）”という。子牛には“牼”，“牼”，“牼”，“牼”，“牼”，成牛には“牼”，“牼”，“牼”といった呼称がある。さらに未経産の牛は“牼”，子がない，あるいは老齢で子の生めない牛は“牼”，そして良い牛は“牼”という。

この通り牛の名称は多彩であり，中国古代には牛を中心とした畜産業の発達した時代があったことを物語っている。

4 言語における「牛」及びそのイメージ

牛に関する言葉は数多く，枚挙に暇がない。ここでは比較的よく使われるもののみを挙

げる。

(1) 人のたとえ

A. 成語

① “老牛舐犢”（親牛が子牛をなめる）¹¹⁾

この成語の出典は『後漢書・楊彪伝』である。三国時代、曹操の配下に博識で頭の切れる楊修という主簿がいた。魏と蜀の交戦中、曹操は漢中へ兵を進めて峡谷の入り口に陣を張るが、そこで進退窮まってしまった。攻めるには不利、かといって退いては沽券にかかわる。そんなジレンマにさいなまされる曹操の食卓に、ある日鶏のスープが運ばれてくるのだが、そこに浮かぶ鶏の肋骨が彼の心を捉えた。そしてたまたま指示を仰ぎに来た夏侯惇につぶやいたのである。「鶏肋、鶏肋だ。」楊修はこれを耳にすると荷物をまとめ始め、それをいぶかしむ夏侯惇に言った。「鶏肋は食べるには味がないが、捨てるにも惜しい。宰相は漢中を鶏肋にたとえられたのです。つまりここに留まっても無益、引き揚げるといことです。ですから帰り支度をしております。」その後、曹操は果たして撤退を命じたのだが、自分の心を即座に見透かした楊修が癪に触った。さらに楊修は曹操のライバル、袁術の甥であったため、後の禍根を絶つべく、士気を乱したとして楊修を殺してしまったのである。残された楊修の老父、楊彪は身も世もなく嘆き悲しみ、憔悴しきってしまう。彼のあまりのやつれように曹操は尋ねた。「なぜそれほどまでにやせ細ってしまったのだ。」すると楊彪は悲しげに答えた。「親牛が子牛をなめるのと同じです。愛しいせがれが、子牛が死んでしまったのです、どうして親牛がやせずにおられましょうか。」曹操はこれを聞くと黙り込んだ。その後、“老牛舐犢”は両親が子供を慈しむ深い愛情のたとえとなった。

→この成語を見れば、親牛は子牛をいとおしむ、「人情味」あふれる動物であることが、一目瞭然である。

② “牛衣对泣”（牛衣に対泣する）

この成語の出典は『漢書・王章伝』である。前漢の時代、王章という者がいた。泰山鉅平にあった彼の生家は貧しく、若いころに都長安に上り、学問を志した。苦学生である王章は妻とあばら家に住まい、寝台も夜具もないような惨めな暮らしをしていた。冬ともなると夫婦は寒さに震えつつ、床に草を山と敷き、麻や草で編み上げた粗末な「牛衣」を掛けて暖を取るような有り様で、そんなある日、王章は重い病の床にふしてしまった。生きる自信を失った彼は牛衣をかぶって泣き出し、涙を流しながら妻に最期の別れを告げるが、優しくしっかり者の妻は夫を慰めて言った。「私たちは貧しいけれど、あなたが病気を治して、学問に精進すれば、きっとこの窮状から脱することができるでしょう。どうか望みを捨てないで。」これを聞いて大いに感激した王章は生きる決意を固め、妻の看護もあって日

に日に健康を取り戻していった。そしてやがて漢の元帝の代に左曹中郎将、武帝の代には司隸校尉から京兆尹に抜擢され、立身出世を遂げたのであった。この成語は貧しく卑しい夫婦が共に手を取り合って貧苦に耐える様子を形容するのに用いる。

牛衣は“牛被”（牛の掛け布団）ともいい、牛用の防寒具である。寒い冬が訪れると、草や麻のたぐいを編んで牛に「服」をこしらえてやるのだが、この服をかつては「牛衣」と呼んだ。古代の貧しい人たちはよくこの牛衣で寒さをしのいだことから、「牛衣」は貧困を象徴するようになったのである。

→「牛衣」はその昔、人々が牛の防寒のために麻や草で編んでやった服であり、当時、牛が非常に大切にされていたことがうかがわれる。

③ “吳牛喘月”（吳牛月にあえぐ）

中国の江南地方はかつて呉の国の所在地であったが、この「吳牛」とは江南地方の水牛である。この言葉に関しては、漢の応劭の『風俗通義・佚文』や『世説新語・言語』に記述があるので見てみよう。江南地方は暑さが厳しいが、吳牛はとても暑がりであり、夏には水につかるか日陰の涼しい所で涼をとるのが常であり、暑さを嫌うあまり、空に浮かぶ真ん丸い月を真昼の太陽と勘違いしてあえいでしまう牛もいるという。そこでこの成語は唐の李白が“云阳上征去，两岸饶商贾。吳牛喘月時，拖船一何苦！”と詠んだように酷暑を形容するほか、痛手を受けたことがある事物に似たものを見るだけで疑心暗鬼になることのたとえとなった。これにまつわる話が『世説新語』に記載されている。西晋の武帝、司馬炎には満奮という臣下がいた。彼は南方の出身でとりわけ寒がりであり、冬ともなると猛虎を恐れるがごとく寒風を嫌った。木枯らしが吹く真冬のある日、武帝のお召しがあり、満奮は宮中に上がった。宮中の北側の窓には頑丈なガラスが張ってあったが、なにぶん透明なので今にも冷たい風が入ってきそうである。彼は思わず身震いし、窓辺に座ろうとしなかった。そこで武帝が「窓はガラス張りだから風など入っては来ない」と教えてやると、満奮は恥じ入りながら答えた。「私は吳牛のようなものでございます、吳牛が月を見てあえぐように、風が入ってくるのではなからうかとびくびくしているのです。」こうしてこの成語には別の意味が加わり、風刺的な色彩も帯びるようになったのである。

→この成語から、牛は暑がりであり敏感、そして月を真昼の太陽と勘違いするほど愚鈍であると人々が考えていたことがわかる。

④ “对牛弹琴”（牛に対して琴を弾ず）

この成語の出典は後漢の牟融の『理惑論』である。昔、公明儀という琴に秀でた音楽家がいた。ある日彼は立派な牛が頭を垂れて草をはんでいるのを見かけ、草地に琴をしつらえて、牛に聞かせようと「清角之操」を奏でた。ところが牛は何も聞こえていないかのように草をはみ続け、彼を一顧だにしない。これを見た公明儀は仕方なく演奏の手を止め、考

え込んでしまった。自分の奏でる曲はこんなにも美しいのに、なぜ牛は反応しないのか。やがて彼は悟る。牛は琴の音が聞こえてはいるのだが、曲が高尚過ぎて牛の心に届かないのだと。後にこの成語は愚か者に道理を説いても無駄であることのたとえとなり、相手をさげすむ意味も含むようになった。無知、あるいは飲み込みの悪い聞き手を「牛」にたとえているのである。“対牛鼓簧”という成語も意味は同じである。

→この成語から、「牛」と「人間」は意思の疎通ができず、人は知的、牛は人よりはるかに劣る愚かな動物である、ということが読み取れる。

⑤ “牛鬼蛇神”（牛の妖怪と蛇の化け物）

“牛鬼”は仏教の説話に登場する牛頭の鬼，“蛇神”は蛇体の神のことで、仏教では“牛头”と“铁蛇”は妖怪変化とされていた。唐代以降，“牛鬼蛇神”は魑魅魍魎の代名詞となったが、この用法は唐の杜牧の『李賀歌詩集序』に見られる。清代になるとこの成語は荒唐無稽、奇妙きてれつな人や事物のたとえとなり、清の夏敬渠の『野叟曝言』の46にあるのはこちらの用法である。現在では主に、様々な悪人のたとえとして使われている。

→これは仏教説話に由来する言葉であるが、ここから仏教における「牛」のイメージがうかがえよう。つまり、地獄の鬼の頭が牛のそれであるということは、牛は人間にとって摩訶不思議で恐ろしい動物であり、またライバルでもあるのである。

⑥ “牛驥同皂”（牛驥槽を同じうす）

直訳すると、牛と良馬を同じ飼い葉桶で飼うという意味である。漢の鄒陽の『獄中上書自明』が出典で、賢人凡人が入り乱れる中へ逸材を置くという意味である。現在では賢愚を分けないことをたとえて用いる。“牛驥同堂”や“牛驥共牢”も同意である。

→「六畜」のうち、「牛」は「馬」の次に列せられ、その地位は「馬」よりも劣る。ましてやここに出てくる“驥”は「駿馬」であるのに対し、「牛」は普通の牛であるからその違いは歴然としている。「賢者」が「駿馬」，「愚者」が「牛」にたとえられているのは、「牛」は「馬」に及ばぬものであり、「愚人」の象徴である、と人々が見ていたためである。

⑦ “牛头马面”（牛頭馬頭）

仏教で頭が牛や馬の形をした地獄の獄卒のことをいい、『楞嚴經・卷八』、『景德伝燈録』や唐代の『敦煌変文』に見られる。後にこの成語は醜悪な人や凶悪なやからのたとえとなり、明代の姚茂良の『双忠記』ではこの意味で用いられている。

→この成語については⑤とほぼ同じ解釈ができよう。

⑧ “气壮如牛”（意気盛んなこと牛の如し）

これは現代中国語のフレーズであり、古語には見られない。この成語は純粋な褒め言葉ではなく中性の言葉であり、「虚勢を張る」ことのたとえとして使われていた。しかしここ20年来、新聞や雑誌で次のような使い方をしているのを目にした。“改革开放以来，人们

的生活富裕了，中国的世界地位提高了，中国是气壮如牛。”（改革開放以来，人々の生活は豊かになり，中国の国際的地位は向上した，中国人は意気軒昂だ）とか“申办奥运成功，北京人是气壮如牛。”（オリンピック誘致に成功して，北京の人々は意気揚々としている）などである。これらはもちろん良い意味で用いられている。

→ この成語からわかるのは，牛に対する人々のイメージである。すなわち，「牛」は強くて丈夫であり，威圧感がある。これはプラスの見方であるが，時にそれは表面上のもので，牛は人が思っているほど強気ではなく，むしろ弱腰なのである。

⑨ “气喘如牛”（あえぐこと牛の如し）

この成語自体は清代の『儿女英雄伝』39回，“脸是喝了个漆紫，连乐带忙，一头说着，只张着嘴，气喘如牛地拿了条大毛巾擦那脑门子上的汗。”（飲んだ後の顔は紫色で，うれしいやらいそがしいやら，休むことなくひたすらしゃべり，それだけで牛のようにぜいぜいと息を切らせ，額の汗を大きな手ぬぐいでぬぐっていた）の文章に登場する。はげしく，せわしく呼吸する様子を形容する。“牛喘”は割合古くからある言葉で，初出は『漢書』七四，「牛が暑がってあえぐ」という意味である。

→ この成語は人を形容するときに用いられる。けなし言葉ではないが，褒め言葉でもない。あまり優雅ではないという意味が幾らかこもっている。

⑩ “牛角挂书”（牛角書を掛く）

勉学にいそしむことのたとえで、『新唐書・李密伝』が出典である。隋代に李密という読書人がいた。没落してしまったとはいえ，貴族の出である彼は，少年のころ宮中に上がり，近衛兵を勤めたことがあった。学問好きであるがゆえに，当直中も勤務に専念できず，職を解かれてしまうが，李密はその後寸暇を惜しんで学問に励んだ。あるとき彼は牛に乗って出かけたが，牛の角に『漢書』を全巻掛け，その中から一巻ずつ取り出しては読み，牛を進めながら読書に夢中になっていた。そんな李密を見かけた大臣の楊素は，彼の後について行くよう御者に命じ，李密が新たな巻に手を伸ばしたときに声をかけた。「君はどこを読書人かね。」「私は，遼東襄平出身の李密と申します。」「何を読んでいるのだ。」「『漢書』の「項羽本紀」を読んでおります。」李密としばらく会話を交わした楊素は，これはひとかどの人物であると思い，帰宅後息子の楊玄感にそのことを話した。楊玄感はこれをきっかけに李密とよしみを結び，李密は後に大事を成し遂げた。こうして生まれた“牛角挂书”という成語は今日にまで伝わっている。

→ 牛の体中どこを取っても，人間にとっては宝物である。「角」もまたしかりで，相当な重さになる『漢書』全巻を掛けられるほど，頑丈で耐久性に優れている。また交通手段としても有用な牛は人を安全に目的地に運び，様々な形で人間の役に立っている。この成語からはこのようなことが読み取れよう。

⑪ “九牛一毛”（九牛の一毛）

この成語の出典は『史記・報任少卿書』である。漢代の名将、李陵は兵を率いて匈奴討伐に赴くが、あえなく敵の軍門に降った。武帝はこの報を聞くと怒り狂って李陵を国賊とのしり、大臣の多くがこれに迎合したが、ただ一人司馬遷のみは、李陵の投降は不本意なものであり、彼は罪をあがなうべく、手柄を立てるチャンスがうかがっているにちがいないと主張した。武帝は司馬遷が李陵を弁護したとして立腹し、彼を投獄、残酷にも宮刑に処したのであった。司馬遷は自殺を考えるが、自分のような卑しい身分の者が死んだところで皇帝や大臣は“九牛亡一毛”（九牛が毛を1本失う）ぐらいにしか思わないであろう、と思い直し、生きる決意を固めた。こうして彼は獄中で大著『史記』を書き上げたのである。その後“九牛亡一毛”は“九牛一毛”と縮められ、多数の中のきわめて少ない一部分のたとえとなった。「九牛」は「9頭の牛」ではなく、「たくさんの牛」の意である。

→「牛毛」は密生しており、それだけで無数であるが、さらに牛自体の数も多い、と先人たちは見なししていたようだ。これは当時、畜産業が発達しており、牛が大多数を占めていたためであろう。またこの成語から牛の歴史の古さがうかがい知れる。

B. 熟語・ことわざ

① “牛马走”（手先）¹²⁾

こき使われる人のたとえであり、漢の司馬遷が著した『報任少卿書』が初出である。宋の陸游の『雜興』や明の汪延訥の『種玉記』でも同じような意味で使われている。

→「牛」は人の道具、人より下の存在である。こき使われる人をたとえば「牛馬」という。

② “牛耕田，马吃谷”（牛は田を耕し，馬は穀物を食べる）

待遇が不公平で、一方は苦しみをなめ、もう一方は幸せを享受していることのたとえである。“牛吃草，马食谷”ともいう。

→「牛」が勤勉の象徴とされている。

③ “宁为鸡口，无为牛后”（鶏口となるも牛後となるなかれ）

大きな集団の下っ端になるよりは、小さな集まりでもその頭^{かしら}となるほうがよい、という意味で、「牛後」とは牛の肛門のことである。この成句の出典は『戦国策・韓策一』であり、明代の『紅拂記・俊傑知時』（張鳳翼著）や『東周列国志』第九十回（馮夢龍著）にも同様のものが見られる。

→「六畜」の序列において、「牛」と「鶏」とではやや開きがある。「家畜」の格付けは紀元前1100年頃の『周礼』にまでさかのぼり、その順は馬、牛、羊、豕（豚）、犬、雞（鶏）である。そしてこの成句では「牛」と「鶏」が「大」と「小」のコントラストをなしている。

④ “初生牛犊不怕虎”（生まれたばかりの子牛は虎をも恐れない）

「恐れを知らぬ若者」のたとえとして使われ、『三国志』第74巻（明・羅貫中）で用いられている。“牛犊”は1歳未満の「子牛」である。

→「牛」は生まれながらにして「大物」であり、恐れを知らず、肝が据わっている。

C. その他

① “牛”

「頑固」、「強情」という意味で、この用法の初出は『北史・邢昺伝』（唐・李延寿）の“昺好忤物，人谓之牛。”（昺はよく刃向かうため、牛と呼ばれている）である。また清の名著、『紅樓夢』117回に“若是牛着他，……（後略）。 ”（もしも彼女の言うことを聞いてやらなかったら……）とあるように、後世では「従わない」という意味も付加された。さらに現代中国語では、「牛」には「傲慢」という意味もあり、よく“牛气”などという。

このほか、“你太牛了，又拿了全班第一。”（君はすごいな、またクラスのトップになった）という用法からわかるように、「立派」という意味もある。これは恐らく「牛は大物」という通念に起因するのであろう。

→日常生活における牛は度々人の言うことを聞かず、強情で頑固だと考えられていた。また、昔から牛といえば大物の象徴であったから、人々が「傲慢で尊大」という印象を抱くのはごく自然な成り行きであったと思われる。

② “牛脾气”（牛の気性），“牛性子”（牛の気質）

これは現代中国語でよく用いられる言い方であるが、歴史書にも似たような用法が見られる。『北史・邢昺伝』に“昺好忤物，人谓之牛。”とあるのは、邢昺という人はよく反抗的な態度を取り、頑固で強情であったため、人から「牛」と呼ばれていた、という意味である。また『紅樓夢』第十七回には“众人见宝玉牛心，都怕他讨了没趣。”（皆、宝玉の強情振りを見て、彼が恥をかくのではないかと気をもんだ）とあり、この“牛心”は“牛脾气”，すなわち「強情っ張り」であると解されている。現代中国語の“牛脾气”，“牛性子”はごく身近な言葉であり、気性が激しい、頑固、強情なことをいう。

→ここからわかるのは、『説文解字』で“牛，大牲也”（牛とは大きないけにえである），“牛为大物”（牛は大物である）と解釈されているように、先人たちの観念では「牛」といえば「大きい」ものだったのである。そして牛の強情な気性もまた「大きい」ことの特徴といえよう。

③ “顶牛”（角突き合わせる）

意地を張り合って譲らないことや衝突することのたとえであり、その由来は割合古く、清代の『兒女英雄伝』31回に“大家吃了早饭，拿了副骨牌，四家子‘顶牛儿’。”（皆朝食を食べてからカルタを手し、4家族で「頂牛儿」をした）とある。“顶牛”は元々日本の七

並べに似たカルタ遊びの一つである。複数のプレイヤーが数のつながる札を順に場に並べていき、つなげられない場合は手札から1枚を伏せて置く。最後に伏せた札がないか伏せた札の枚数が少ないものが勝ちとなる。また“接龍”(接龍)という別名もある。

→牛は強情で、負けず嫌いであると見られている。

④ “牛肚”(牛の腹)，“牛飲”(牛飲)

これは「よく食べる」，「よく飲む」ことのたとえである。牛は体が大きく胃袋が四つもあり，食べ物を飲み込んでから反芻するため食べる量が多い。ここから大食漢をあざけて“牛肚”という。“牛飲”の初出は『史記・殷紀』で，牛のように身をかがめ，地に顔をつけて飲む，という意味であった。それが宋代になると意味が転じ，“豪飲”(鯨飲する)を“牛飲”というようになった。

⑤ “老黄牛”(老いた黄牛)

「こつこつと皆のために立ち働く人」のたとえである。“黄牛”とは牛の一種で，その多くは役用種であり，耕作や運搬に使えるほか，皮は革製品に，肉は食用にと用途が広い。黄褐色の毛色から“黄牛”の名がある。

→「牛」は生涯を通じて黙々と勤勉に働き，献身的である。

⑥ “孺子牛”(孺子の牛)

「人々のために喜んで働く人」のたとえである。この言葉は何といっても魯迅の詩，“横眉冷对千夫指，俯首甘为孺子牛。”(敵の指弾には眉を釣り上げて冷たく応対するが，人民に対しては頭を垂れ甘んじて牛となろう)で有名である。しかし実は『史記』にまでさかのぼる言葉で，“孺子”とは子供のことである。春秋戦国時代，斉の景公は幼い息子を喜ばせようとよく牛のまねをし，四つんばいになって縄をくわえ，それを息子に引かせていた。ところがあるとき，息子がうっかり転んでしまい，景公の前歯は折れてしまった。この故事来歴は春秋時代の『左伝・哀公六年』に記載されている。

→「牛」は奉仕の精神の象徴である。

⑦ “牛皮匠”，“牛皮大王”(ほら吹き)

ほらを吹いたり，大言壮語する人のことで，“吹牛”(ほらを吹く)の来歴については次ページを参照していただきたい。

→“吹牛”は“説大話”(大きなことを言う)と同義であり，“牛”イコール「大きい」という概念がこの言葉に多少反映されていると思われる。

(2) 物のたとえ

人のたとえほど多くはないので，成語やことわざといったジャンル分けをせずに述べる。

① “牛山”，“牛女”，“牛斗”，“牛川”，“牛芸”，“牛首”，“牛渚” など

先人は様々なものの名称に「牛」を用いた。例えば星座は“牛女”，“牛斗”，“牛宿”，“牛郎”，山川は“牛山”，“牛渚”，“牛女”，“牛川”，地名は“牛首”，動物は“牛魚”，“牛尾狸”，植物は“牛蒡”，“牛筋”，“牛芸”，“牛肚菰”，“牛藻”といった具合である。

これは彼らが牛を中心に世界を捉えていたためである。

② “火牛”，“九牛瓮”，“八牛弩”

“火牛”とは城の守備に用いた古代の兵器の一つである。柴や草など燃えやすいものをくくった太く大きな束で、形が牛に似ており、戦時これに火をつけて敵を防いだ。このほか攻撃用の“火牛”もあり、こちらは牛に火器を結わえつけ敵陣に突進させた。“九牛瓮”¹³⁾は殺傷能力が極めて高い大砲である。口径の大きな銅製の大砲9門をたがで締め、火薬や石を込めて一斉発射するものであるが、その威力は絶大であった。これは牛を使ったものではないが、9頭の雄牛にも匹敵するすさまじい威力から“九牛瓮”の名がある。“八牛弩”¹⁴⁾は古代の連動式弓矢で、“牛弩”ともいう。台の前方に3張の強弓を並べ、中央のものをメインとしてそれぞれを縄でつなげ、滑車の原理で同時に矢を放つという武器で、威力が8頭の牛に勝ることから“八牛弩”と名付けられた。

→ 古代の戦に用いられた兵器や武器には、牛にちなんだ名称のものが少なくない。これは当時の、牛の力に対する崇拝の表れである。

③ “吹牛皮”（牛の皮袋を膨らませる）

“吹牛皮”は元々中国の西北地方の方言である。水深が深く、流れの急な大河では船による航行が不可能なため、現地の人々は牛の皮で作った袋を膨らませ、これをつなぎ合わせていかだとすることを思いついた。このいかだは荒波の立つ急流でも進むことができる上、積載量は数トン、数十トンにもなる。明代の姚福の記述によれば、明の初代皇帝、朱元璋も兵を率いて淮河を渡る際、この牛の皮袋のいかだを用いたという。このいかだから“吹牛皮”という言葉が生まれたのだが、このいかだの皮袋は空気を入れると一瞬にして大きく膨らむことから、現代になると“吹牛皮”は「大きなことを言う」という意味合いで使われるようになった。また“吹牛皮”は“吹牛”ともいう。

→ 頭から尾まで、牛には使えないところなどなく、人間の役に立っている。この言葉にも「牛」イコール「大きい」という観念が表れている。

④ “风马牛不相及”（風馬牛も相及ばず）

両者の隔たりが大きく、何の関係もないことのたとえであり、『左伝・僖公四年』の記述から生まれた言葉である。僖公4年、斉の桓公が楚の国に攻め込んで来たため、楚王は斉の大夫、管仲に使いを送り、“君处北海，寡人处南海，唯是风马牛不相及也。不虞君之涉吾地也，何故？”（貴方は北海に、当方は南海にあり、風する牛馬でさえ会えないほど両者の

間は遠く隔たっている。思いもかけず貴方は我が地に踏み込んできたが、何ゆえであるかと訴えた。“風”とは牛馬などの家畜が発情期に雌雄で呼び合うことである。盛りのついた牛馬は繁殖のために異性を誘うが、牝馬と雄牛、雌牛と牡馬が誘い合ったり交尾したりすることはありえず、牛と馬を交配させようとするのは見当違いなことである。ここから“風馬牛不相及”というようになったのであり、“牛头不对马嘴”、“牛头不对马面”といったたとえも意味は同じである。

→ 春秋時代、諸侯は駆け引きや盟約締結の間では、意思を詩に託す、つまり『詩経』の文を引用して意向を表明するのが常であった。ところがここでは両国の関係を牛馬の発情や交尾になぞらえており、一見当時の風潮にそぐわないように思われる。しかしこのような推測が可能であろう。この時代、牛馬は人間と最も近い動物で、人々はその気性や習性を知り尽くしていた。牛と馬が交尾するなどあり得ぬことは周知であり、だからこそ楚の国の使者は今日のけなし言葉よろしく、わざと下卑た言い方をしたのである。ここにも人類の太古の遊牧生活とその経験が反映されている。現在ではこの語は「両者がまったくの無関係であること」の意で用いられるのみで、それ以上に深い意味合いはなく、ののしりの言葉でもない。この語の“風”にどんな意味があるのか、と気に留める現代人はさほど多くはあるまい。

⑤ “牛歩化”（牛の歩みのよう）

物事が遅々として進まないことのたとえであり、この用法は古典文献には見られないが、『魯迅書信集・致沈雁冰』には、“昨收到一日信，才明白了印刷之所以牛歩化的原因，（後略）”（昨日手紙を受け取り、ようやく印刷が遅れた理由を知った）とある。

→ 牛は愚鈍でのろまであると捉えられている。

⑥ “牛劲儿”（牛の力）

「大きな力、ばか力」の意味で、“劲儿”は「力」を表す。この語は褒貶のどちらでもない中性的な言葉であり、現代中国語でよく用いられている。

→ 牛は力持ち、それも怪力の持ち主であり、人間にとっては「頼もしい」存在である。

人や物のたとえで、「牛」にちなんだ成語、ことわざ、歇後語¹⁵⁾、熟語、語彙はこれ以外にも無数にあり、とりわけ熟語は“多如牛毛”（牛毛のように非常に多い）である。本稿では常用されているもの、その中でも「牛自体の言語におけるイメージ」がはっきりと表れている言葉に絞ったため、“牛刀小试”（小手調べで切れ味を発揮する。簡単な仕事において大器の片鱗をうかがわせることのたとえ）や“牛鼎烹鸡”（牛を煮る鼎で鶏を煮る。優れた才能をつまらないことに使うたとえ），“牛毛细雨”（霧雨），“牛年马月”（いつになるかわからない）などはここでは取り上げなかった。

5 七夕伝説

牽牛と織女の物語は原始の星辰崇拜にまでさかのぼる。人々は天に広がる星座を時に神格化、時に人格化し、そこからこの物語が生まれたのである。牛宿は二十八宿の北方七宿、玄武の第二宿であり、“牽牛星”（牽牛星，彦星¹⁶⁾），“牛郎星”（牛飼い星，彦星¹⁶⁾）ともいう。天の川の東に位置し、六つの星から成るが、そのうちの三つは天秤棒で荷を担いで歩いているように見える。三つの星で構成される“織女星”（織女星，織姫星¹⁶⁾）には“天孫星”という別名があり、天の川の西に正三角形を形作るこの星座は織機の梭に見立てられている。牽牛星と織女星は天の川を挟んで相対し、人々の空想を大いにかき立てる。中国最古の詩集『詩経』にもこの二つの星の記録があり、七夕伝説の原型かと思われる。『小雅・大東』より、その詩を引用しよう。

维天有汉，监亦有光。

跂彼织女，终日七襄。

虽则七襄，不成报章。

皖彼牵牛，不以服箱。

（周王朝の政治に苦しむ東方の人々の嘆きを詠ったものであり、大意は「天の川に織女がいても現実には織物ができるでもなく、牽牛の牛に車を牽かせるわけにもいかない」とされている）

漢代になるとこの牽牛星と織女星は完全に人格化された。以下は『古詩十九首・迢迢牽牛星』である。

迢迢牽牛星，皎皎河漢女。

纤纤擢素手，札札弄机杼。

终日不成章，泣涕零如雨。

河汉清且浅，相去复几许。

盈盈一水间，脉脉不得语。

（遙か彼方の彦星，白々と輝く織姫。

か細い手を動かし，ぱたんぱたと機を織る。

終日織っても仕上がらず，こぼれる涙は雨のよう。

天の川は清く浅く，どれほど隔たっていない。

けれども澄み切った一筋の流れにさえぎられ，

見つめ合うばかりで言葉を交わすことができない。）

詩に詠まれているのは天空の牽牛星と織女星であるが、人間的なイメージを感じさせ

る。

南北朝時代に梁の殷芸が著した『小説』（『月令広義・七月令』より）で、牽牛織女の物語の輪郭はほぼ完全な形となった。そのあらましを述べると、天帝の娘、織女は天の川の東に住まい、身なりを構うこともなく、来る年も来る年も家にこもって機織りに精を出し、ついに見事な羽衣を織り上げた。天帝は独り身の彼女を不憫に思い、天の川の向こう岸に住む牛飼いに嫁ぐことを許すが、織女は嫁に行くと機を織らなくなってしまった。これに天帝は激怒して、川の東岸へ戻ってくるよう娘に言い渡し、年に一度だけ二人が会うことを許したのであった。

『小説』に記された牽牛織女の物語は一応の形は整っているものの、織女の人物像などが完全ではない。その後、この伝説は代々語り継がれていくうちに肉付けされ、やがては心の琴線に触れる美しい神話が作り上げられたのである。

牽牛は下界の寄る辺ない孤児で、しょっちゅう兄や兄嫁にいじめられていたが、彼が家から独立する際、兄夫婦は年老いた牛を1頭だけくれてやった。織女は才色兼備で機織りの上手な天界の娘で、あるとき天女たちと連れ立って、天の川で水浴びをしていた。このとき天の川のほとりには、牛の勤めに従って牽牛もやって来ており、織女の羽衣を盗んでしまう。羽衣を失った織女は天宮に戻ることができず、結局牽牛の妻となった。夫婦は一男一女に恵まれ、幸せな日々を送っていたが、やがて天帝の知るところとなり、怒り狂った天帝は兵を遣わし、織女を天界へ連れ戻してしまった。牽牛は織女が連れ去られたのを見て子供たちと共に泣き崩れるが、そのとき死の淵にあった牽牛の牛は、自分が死んだらその皮をかぶり、天上へ織女を探しに行くよう牽牛に言い聞かせた。牽牛は牛の言葉通り子供たちを連れ、織女を追って天上へ向かうが、あと一歩というときに、西王母がさっと頭からかんざしを引き抜いて空を搔くと、牽牛と織女の間はたちまち滔々たる天の川と化した。二人は川を隔てて見つめ合うことしかできず、切ない思いは募るばかりであったが、やがて天帝が心を動かし、毎年7月7日¹⁷⁾に鵲が渡す橋の上で二人が会うことを許した。こうして毎年7月7日の七夕には、無数の鵲たちが天の川に橋を架け、牽牛織女はこの橋の上で逢瀬を楽しむことになったのである。

牽牛織女の物語は、中国人の誰もが知っている。この物語は中国に脈々と続いてきた農業社会の産物であり、中国の天体崇拝や動物（牛）に対する信仰、そして男は耕作、女は機織りという社会の実情が集約されている。

彦星と織姫星の命名は非常に興味深い。始めに名前ありきで、その後を追う形で牽牛織女の物語が生まれたとされているのである。星に“牽牛”（牛引き）、“牛郎”（牛飼い）という名を与えたのは、人々の日常生活において牛がごく当たり前の存在であったことの表れであろう。なぜなら人というものは常に身近なものにちなんで命名するものであるから

だ。また夜空に輝く満天の星を見上げ、いかに想像の翼を広げようと、完全に現実から乖離しきれものではない。先人たちが天空の星々を「牽牛」に見立てたのは、この星に名が付く以前から、牛文化が人々の間に深く根ざしていた証である。

今日では離れ離れに暮らす夫婦をたとえて“牛郎织女”（牽牛織女）という。

6 民話における「牛」

中国で現在、民話の分野で最も権威があるとされる書籍の一つに1997年から中国ISBNセンターより出版されたシリーズ『中国民間故事集成』全11巻があり、「牛」にまつわる伝説も約63篇掲載されている。ここではそのうち代表的なものを四つだけ選び、「牛」のイメージを探ってみたい。

(1) “牛原是天廷丞相”（牛は天の朝廷の丞相だった）

〈福建巻・動植物伝説 P.380〉（あらすじ）¹⁸⁾

言い伝えによると、天の玉皇大帝は、世界を切り開き、万物を治めさせるべく、賢く勇敢な最愛の息子を下界へ送り出した。息子は下界へ降りてきたものの、そこは雨が降ったり降らなかったり、寒かったり暑かったりで、食べ物も道具もない。息子の境遇を知って身につまされた玉帝は牛丞相を呼び、五穀の種を詰めた大袋を一つ、草木の種を詰めた小袋を二つ持たせ、下界に行って種まきをするよう命じるが、この際、「五穀は肥沃な土地を選んで、土中3寸の所に植えよ。草木の種はやせた土地に適当にまけばよい。時期を逸するな、行く先々でまけ、ぐずぐずしてはならんぞ。」と重々言い聞かせた。玉帝の命を受けて天宮を後にした牛丞相は、下界に降り立った当初は怪力を発揮して、疲れを知らずに働いた。ところが生まれてこの方、肉体労働をしたことのなかった牛丞相は、一気に草木の種をまいて汗みずく、疲労困憊してしまう。そして袋にぎっしりと詰まった、おびただしい数の五穀の種に目をやり途方に暮れた。「こんなにたくさんの種、いつになったらまき終わることやら。どうせきちんと植えたかどうかなんてわかりはしない、適当にまいてやれ。」そう考えた牛丞相は、意識もうろうとしたまま目の前のぬかるみに種をまくと、すやすやと寝入ってしまったが、生えてきた五穀はひよろひよろで色も悪く、実を結ばなかった。この有り様は玉帝の耳に届き、召し出された牛丞相はひざまずいて許しを請うたが、玉帝は牛丞相を下界の牛に貶めることを即断し、何度生まれ変わろうと人に仕えて罪をつぐなうように申し渡した。こうして牛丞相は下界に落とされ、贖罪のために草を糧として穀物を口にせず、来る日も来る日も一生懸命に働いているのである。

→「牛」は人間の化身であり、いわれなくして「悲運」を与えられたわけではない。牛は天から降臨してきたものであり、もしこつこつとまじめに働かなければ、人もまた牛と同じ運命をたどり、一生草をはみ、こき使われて苦勞するのである。

(2) “牛的神话”(牛の神話)

〈陝西卷・神話 P.14〉(あらすじ)

昔々、万民を治めていた玉皇大帝は、自分は贅沢三昧の暮らしをしておきながら、下界の人々には粗末な食事しか許さず、残りの穀物は天宮に納めさせていた。天の南門を守っていた牛面神はこの状況に義憤を感じていたが、ある不作の年、人々が食うや食わずの生活をしているとき、玉帝は牛面神に下界への伝令を命じた。玉帝の命令は「食事は三日に一度、余った穀物は天宮に上納せよ」というものであったが、人々に同情した牛面神は「食事は一日に三度、余った穀物は下界で貯蔵するように」と伝えた。いつまでたっても穀物が届かないのをいぶかしんだ玉帝は、調査の末、牛面神が命令を曲げて伝えたことを知る。玉帝が激怒したのは言うまでもなく、牛面神を蹴り上げてその上の前歯を折り、さらに彼を下界へ落とした。天宮を去る際、牛面神が「私は下界で何を夜具とし、何を食べればよいのでしょうか」と訪ねると、玉帝は「毛氈を敷き、布団をかぶって寝るがいい、そして草でも食べるのだな!」と冷たく言い放った。牛面神は下界に下ってから、人々が夜具すら事欠いているのを知ると、自分の夜具を彼らに与え、自らは地べたに寝た。前歯のない牛が睡眠中に吐く長い長い息は、玉帝への恨み言であるという。かいがいしく働く牛の姿に玉帝も心を動かされ、毎年大晦日には牛に腹一杯食べさせてやるよう人々に命じたが、この風習は今日まで続いている。

→牛が勤勉誠実であることは、怒りを抱いていた玉帝すら認めるところである。牛は善良で献身的なのである。

(3) “牛大王下凡传谷种”(牛大王、降臨して穀物をもたらす)

〈浙江卷・神話 P.53〉(あらすじ)

大昔、世の人は皆、玉皇大帝によって支配されていた。当時の人々はいくら働いても衣食に窮する有り様で、食事は一日に一度、残りの穀物はすべて天へ送られ、玉帝の贅沢に費やされていた。天の北門を守る牛大王は、ある年の春、種もみまで食べつくして飢えに苦しむ下界の人々のために、玉帝の目をかすめて天門を少しだけ開き、穀物を雨に混ぜて下界へと落としてやった。この雨により種もみと食料を手に入れた人々は、その日の雨を「穀雨」と呼んだ。種もみも食料も十分にあり、天候にも恵まれたこの年は大豊作であった

が、玉帝は「一日一度の食事を三日に一度とし、浮いた穀物はすべて天へ納めよ」と勅令を発し、牛大王に伝令を命じた。ところが下界の誰もが朝から晩まで汗水流して働く姿を目にした牛大王は、人々の苦労を思いやり、玉帝の命を曲げて「一日三食」と伝えたのである。この勅令が下ってから、人々は天へ穀物を納めなくなり、生活は日を追うごとに豊かになっていった。これを知って怒り心頭に発した玉帝は、兵に命じて牛大王を天門から下界へ突き落としたのであるが、その拍子に牛大王は上の前歯を失ってしまった。下界へ降ってから、牛大王はつらい畑仕事をよく手伝い、穀物は口にせず草を食べ、いつも人々のために尽くした。こうして牛は「農家の宝」となったのである。

→牛は天から降臨し、下界に来てからは喜んで人のために粉骨砕身した。人には穀物を食べさせ、自らは草を食べる。そして重労働を担ってくれる牛は農家の宝物なのである。

(4) “牛借犄角” (牛が角を借りる)

〈陝西巻・故事 P.441〉(あらすじ)

その昔、牛は好戦的で、しょっちゅう他の動物とけんかをしていたものの、勝ったためしなかった。そんな折、馬が強力な角を持っていると聞いた牛は、さっそく馬を訪ねた。「あなたの角を貸してください。けんかに勝ったら返しますから。」牛が角を返さないのでは、と疑った馬は保証人を立てるよう求め、牛の親友の犬が保証人になった。かくしてまんまと角を手にした牛は、けんかをして負け知らず、すっかり有頂天になり、角を手放しがたくなってしまった。そんな牛を見て、馬は何度も督促に行ったが、牛はもう少し、もう少しと返す様子はなく、果ては角など借りていないと言い張る始末。馬が訪ねても、牛は“没^{モー}、没^{モー}借。”(いや、借りてない)の一点張りなのである。そこで馬は保証人の犬の所へ行ったが、犬は牛の肩を持ち、“忘^{ワン}、忘^{ワン}、忘^{ワン}了。”(忘れた、忘れた、忘れちゃった)ととぼけるばかり。犬に約束を破られた馬はどうすることもできず、「ヒヒーン、ヒヒーン」と泣くしかなかったとき。

→牛はけんか好きの暴れん坊で、しょっちゅう殴り合いをしていた。牛がけんかに勝てたのは馬の助力のおかげであり、馬のイメージは牛よりも良いことがわかる。

この四つの民話からうかがい知れるのは、まず牛に対する人々の畏敬の念である。だからこそ民衆は牛を神の化身、天から降りてきたものとして語り継いだのだ。そして牛の「前世」が丞相や神、役人であったのは、自分たちの困窮を救ってくれたことに対する民衆の牛への感謝の表れであろう。牛は奉仕の精神を持ち、勤勉誠実であるから、正義を主張し、そのためにそれまでの恵まれた生活を捨てることもいとわない。反面、人々は牛が「苦

難」に耐えざるを得ないのはそれなりの理由があり、そんなに情けを掛けてやることはない、人にこき使われるのも当然だ、とも考えていた。また他方で、牛は好戦的というイメージも抱いていたのである。

7 「牛」と十二支

牛は十二支の第二番目の動物であり、丑に相当する。十二支のことを中国語では“十二生肖”といい、“生”は「生まれ年」，“肖”は「類似する，似ている」という意味である。“十二生肖”は“十二属相”，“十二属”，“十二相属”とも呼ばれる。“生肖”とは生まれ年に配された十二支のことで、12種類ある干支には12の動物が当てられている。またこの12種類の動物（鼠・牛・虎・兎・龍・蛇・馬・羊・猿・鶏・犬・猪）は、それぞれ十干十二支の十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）にも振り当てられている。中国に古くから伝わる文献のうち十二支に関する最古の記録は、後漢の王充が著した『論衡』に見られ、人は生まれ年によって似るものが異なる、と当時は考えられていた。丑年は牛の年で、丑年に生まれた人の干支は牛となり、牛に似る、という具合である。この通り十二支は年を表す呼称であったが、同時に時刻を表す呼称でもあり、1日を12等分し、子の刻の神は鼠、丑の刻の神は牛としていた。

十二支は太古の人々の動物崇拜と、動物を用いた紀年法に由来し、原始時代のシャーマニズムから自然発生的に生まれたものである。その起源については見解がまちまちであるが、古代の華夏民族と少数民族の紀年法が融合してできたとするのが一般的である。ごく一部の学者はインドかバビロニアから中国へ伝来したと見ている¹⁹⁾が、中国の天文学者や民俗学者は十二支外来説の観点に異を唱えている²⁰⁾。

牛〔丑〕は十二支の第二番目であるが、十二支の選定と序列について、朱熹²¹⁾は動物の日々の活動時間から決められたとしている。夜の11時から深夜の1時は子の刻であるが、この時間、鼠は最も活発に動き回る。深夜1時から3時は丑の刻で、牛が反芻するところである。深夜3時から5時は寅の刻、虎はあちこちを徘徊し、最も獐犷になる。朝の5時から7時までは卯の刻、日の出前のまだ月明かりが残るころ、月の兎は杵を手につけてと薬を作る……。そして夜の9時から11時は、すべてが寝静まり、ブタ²²⁾が高いびきをかいて眠る亥の刻である。

十二支の動物には自然界における友好あるいは敵対の相関関係があるが、さらに十二支は陰陽五行と結び付いたために、その相生相克の理論が男女の縁組にまで適用され、干支による婚姻のタブーが生まれた。例えば“牛馬相害”（丑年と午年はいがみ合う），“牛羊相冲”（丑年と未年は衝突する），“白马怕青牛”（白馬は青牛を恐れる）などである。

干支が生まれ年や年齢、長幼の序を表す序数の代わりとして中国の民衆に広く受け入れられてからすでに久しく、子供からお年寄りまで誰もが知っている。たとえ家から一步も出ず、字の読めない人であろうと、今年の干支は知らなくとも、自分の干支は間違いなく知っているだろう。

丑年には牛が、寅年には虎が話題に上る。毎年旧暦の年越しの時期になると、必ず脚光を浴びるのが干支である。中央電視台が春節前日の大晦日に放送する「春節聯迎晩会」で「干支」に触れなかったことなどただの一度もない。

また、中国で毎年確実に流行する運勢占いは「干支占い」である。筆者の手元には北京の自由市場の文具を売る露店で購入した、1997年から2002年までの「干支占い」の小冊子がある。それは書籍ではなく、庶民の間に伝わるごく簡単な冊子であるから、著者名も出版社名もないのだが、かえって当たりそうな気がするのは、そのいかにも雑な作りから生々しい庶民の息吹が感じられるためであろう。面白いことに、すべての干支に共通して「(一) 性格」の欄だけは毎年内容が大同小異であり、時にまったく同じということすらある。これは人の性格が「干支の動物の性格に似る」ためであり、それが言わずと知れた約束、暗黙の了解となっている。

次に2002年の原文²³⁾を引用し、民間に伝わる丑年の人の性格判断はどのようなものか見てみよう。

“牛属相象征着，通过艰苦努力才能获得成功，属牛人的性格在十二属相中，还是别具一格的，也是很可贵的，可以说牛年生人是靠得住的，他们安静，有条理，也是一个有耐心的不知疲倦的工作者，他们的稳重朴实，公正无私的工作精神，也很能得到权威人士和领导的赞赏和信用，他虽然有时很固执，墨守成规，也有是很偏见，但他还是能够听取意见的，他的不屈不挠和临危不惧，态度诚实，任劳任怨的精神也是众所不及的，不管他做什么工作总是喜欢有条不紊，坚持固定模式，尊重传统观念，表现出从不杂乱无章和拖泥带水，做事从不喜欢靠手段和偷机取巧来完成，属牛人所靠的是一丝不苟和坚韧的意志，以及高尚的献身精神，做事有始有终，并很厌恶说做不一半途而废，属牛人说话是算数，很讲信用，一言既出，驷马难追，他若欠了债和欠了物，那你不用担心，他会信守诺言，如期归还，属牛人具有天生的领导才能，他很讲以身作则，严以律己，也很会用纪律严格的要求别人，他认为每个人都应该尽心尽职，不应该为别人的缺点赞美也是不存在的，他们有时过于呆板和固执，凡事爱斤斤计较，不易接近，也不善于关心别人，常表现出军人风度，如果有人委屈了他和激怒了他，一旦发起脾气来那也是不得了，这时他会失去理智，会象公牛一样发疯似的进攻任何对手。”（訳：苦勞と努力を積み重ね、やがて成功を収めるのが丑年の典型である。丑年の人の性格は十二支の中でも異彩を放っており、一目置くべきである。丑年生まれの人には信頼に足るといえる。物静かでモラルがあり、仕事面でもタ

フでエネルギーである。その謹厳実直で公正無私な勤労精神はオーソリティーやリーダーから高く評価され、信用を得るであろう。丑年の人は時に頑固で、因習にとらわれるところがあり、思い込みが強いが、人の意見に耳を傾けることもできる。どんな困難にも屈せず、ピンチにもひるまない、そして誠実で苦勞をいとわぬ精神は他の追隨を許さない。何をするにもきっちりとしていて、一定のスタイルを貫き、伝統的な觀念を大切にする。いい加減で煮え切らない態度を取ったことがなく、事を成すために策を弄したり機に乗じたりするのをよしとしない。堅実かつ強靱な意志と気高い奉仕の精神こそが丑年の人のモットーで、何事も終始一貫しており、言動不一致や中途半端が大嫌いである。言ったことを守り、信用を大切に、前言を撤回するようなことはない。丑年の人にお金や物を貸しても心配無用、相手は約束を守り、期日通りに返却するであろう。丑年の人には天性のリーダーシップがあり、身をもって範を示し、己に厳しいことに重きを置く。また厳格なルールを他人に押し付ける傾向がある。丑年の人は誰もが誠意を尽くして職務を果たすべきだと考えている。融通が利かず強情であり、何をするにもささいなことを気にし、近寄りがたい。他人に気を配るのも下手で、常に軍人風を吹かせる。丑年の人を理不尽な目に遭わせたり怒らせたりしようものなら大変である。丑年生まれの人がかんしゃくを起こしたら理性を失い、相手が誰であろうと雄牛のごとく突進して行くであろう。)

8 おわりに

(1) 言語における「牛」のイメージ (現代中国語を主とする)

A. 良い面

「思いやりと人情味がある」、「丈夫で強壯」、「勤勉」、「苦勞に耐える」、「奉仕の精神を持つ」、「肝が据わっている」、「大物」、「負けず嫌い」、「黙々と働く」、「役に立つ」、「力持ち」、「頼もしい」

B. 良くない面

「間抜け」、「貧乏くさい」、「馬より劣る」、「傲慢」、「怖い」、「見掛け倒し」、「不運」、「強情で頑固」、「譲らない」、「大きすぎる」、「のろい」、「ばか力」

(2) 民話における「牛」のイメージ (今日伝わっているものに限る)

A. 良い面

「神靈の宿る動物」、「神の化身である」、「天から降臨した」、「前世は人や役人であった」、「貧者の味方」

B. 良くない面

「不運」、「好戦的」、「暴れん坊」

(3) 十二支における「牛（丑年の人）」のイメージ

A. 良い面

「頼りになる」、「私心がない」、「公正」、「まじめ」、「タフ」、「勤勉で努力家」、「奉仕の精神」、「誠実」、「ピンチに強い」、「言動が一致している」、「終始一貫している」、「出しゃばらない」

B. 良くない面

「頑固」、「杓子定規」、「重箱の隅をほじくる」、「近付きにくい」、「他人を気遣うのが下手」、「怒ると怖い」、「怒りっぽい」

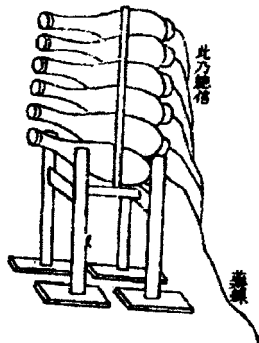
「牛」のイメージは時代をさかのぼるほど良い。これは春秋戦国以降、牛が農耕の主力、農民の友として、人々の生活と密接にかかわるようになったためである。「神格化」から「俗化」へ、「人」から「物」へ、「未知」から「熟知」へと人間と牛の距離は徐々に縮まっていったのである。また社会の進歩と発展につれ、牛の役割も自ずと軽んじられるようになった。牛に求めるものも古代より高度になり、人間の進化、あるいは人間の「わがまま」から「牛」は人間に従属すべきものと見なされるようになった。牛が言うことを聞かないと、人はしゃくに触って仕方がないのである。現代中国語の「牛」にまつわる常用語は、「牛性子」（強情っ張り）、「牛脾气」（強情っ張り）、「牛性」（頑固で強情な性格）、「老牛拉破车」（老牛がぼろ車を引く、仕事をのろのろやっている様）など、その大半があまりよくない言葉である。とはいえ、歴史ある牛崇拜の文化は、中国人の意識の中でいまだに根強いので、言語と文化に見られる「牛」は良し悪し両面があるが、総合的にはやはりプラスの面が勝っているであろう。

注

- 1) この青は黒に近い色で、紺と黒の中間色の牛を青牛という。
- 2) 文学作品や詩歌などについてはすでに多くの先行研究があるため、本稿ではこれらを対象外とした。
- 3) “鼎”は元来食物を煮炊きするのに用いた生活用具であり、今日の大鍋に相当するが、形状はかなり異なる。古代、祭祀の際に、神にささげるいけにえである牛を“鼎”に入れて煮た。
- 4) 歴史学者、顧頡剛著『史林雜識』の考証による。
- 5) 『説文解字』（121年頃）：後漢の許慎の著。文字の形・義・音を説いた中国史上最古の字書。
- 6) 『玉篇』（543年頃）南朝の顧野王の撰による字書。全30巻。
- 7) 『六書故・動物一』宋代の戴侗の撰。
- 8) 『字彙・牛部』（1615年頃）：明代の梅膺祚の撰。比較的平易で、調べやすい大型字書。全14巻。
- 9) 春秋時代に相当する。紀元前551年～紀元前479年。
- 10) ここでいう黄色は褐色に近い。

牛のイメージに関する一考察

- 11) その語に対応する日本語の表現がある場合とない場合があるため、直訳を示すことにした。
12) 直訳が適切でないものは、その単語の表す意味を示す。Cの③・⑦も同様である。
13)

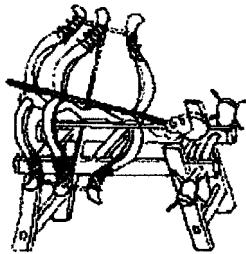


“九牛瓮”

「中国の兵器」

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/7539/>

14)



“八牛弩”

「古今兵械」

<http://www.cnwushu.com/bingqi/index.htm>

- 15) 前後の句からなるしゃれ言葉であり、前句でなぞをかけ、後句で謎解きをする。前句のみを言うことが多い。
16) 日本では星座ではない。
17) 旧暦の7月7日を指す。
18) 紙幅の関係から原文を引用せず、あらすじを紹介するにとどめる。
19) 郭沫若（1952）『甲骨文研究・釋干支』 人民出版社
20) 王紅旗氏は『神秘的生肖文化与遊戲』（三聯書店 1992年版）で、十二支は木星の運行に由来するという新説を展開している。
21) 朱熹 1130年～1200年。南宋の儒学者。
22) プタのことを現代中国では“猪”と書き、“豚”は普通「子ブタ」のことを指す。誤解を避けるため、ここでは仮名のみで記す。詳しくは「ブタ」の項で述べる。
23) 民間に伝わるものであるため“标点符号”（句読点）は必ずしも正しいとはいえないが、原文のまま掲載する。

参考文献

- (1) 郝懿行 『爾雅義疏』 北京市中国書店影印本
(2) 邱崇西（1983）『俗語五千条』 陝西人民出版社

- (3) 北京大学中文系 (1987) 『歇後語大全』
- (4) 鄭宣沐 (1988) 『古今成語詞典』 中華書局
- (5) 劉潔修 (1989) 『漢語成語考釈詞典』 商務印書館
- (6) 張清常 (1990) 『胡同及其他』 北京語言學院出版社
- (7) 武占坤・馬国凡 (1991) 『漢語熟語大辭典』 河北教育出版社
- (8) 吳裕成 (1993) 『人与十二属相』 天津大学出版社
- (9) 馬如森 (1993) 『殷墟甲骨文引論』 東北師範大学出版社
- (10) 袁柯 (1993) 『中国神話通論』 巴蜀書店
- (11) 王紅旗 (1997) 『神妙的生肖文化与遊戲』 山東友誼出版社
- (12) 張皓 (1997) 『十二生肖』 湖北教育出版社
- (13) 史有為 (1997) 『成語用法大辭典』 大連出版社
- (14) 李露露 (1998) 『春牛辟地』 社会科学文献出版社
- (15) 『漢語大詞典簡編 下』 (1998) 漢語大詞典出版社
- (16) 『語海』編輯委員會 (1999) 『語海』 上海文芸出版社
- (17) 『古代漢語詞典』 (1999) 商務印書館